

Eureka IV

六年制通信 No. 18 平成 28 年 9 月 23 日 (金) 号

不易流行

以前、「無用の用」について書いたことがありました。覚えていますか。中学生に配る「ハンドブック」にも毎年載せています。人が大地に立つには足を置けるだけの土地があれば足りる。しかし、それだけでは安心して立ってられない。足を乗せている土地の周囲をすべて取り払って、針先のような地面に人は立ってられない。広大な土地があつてこそ、ゆったりと立ってられる。だから、その、自分の周りにある広大な土地は決して無用のものではない。こういった趣旨です。これは荘子の用いた比喻で、一見無用に思えるものでも、決して無駄ではないことの喩に使われます。学生時代に恩師から老子や荘子について半日ほどレクチャーを受けた記憶がありますが、はっきりと今でも覚えているのは、この土地の話です。「無用の用」の効用を話す先生はとても楽しそうで、また、いくぶん恥ずかしそうでした。今なら、あの時の先生の複雑な表情が、含羞が、よく理解できます。恩師は、liberal arts つまり教養ですが、その大切さを折に触れて話されました。実生活には全く役に立たないように思えるさまざまな教養が、実は人生を豊かにしてくれる。そういうことを若者に伝えようとしてらっしゃいました。

さて、最近世の中が、「すぐに役立つもの」や「即戦力になる人材」などと言いすぎるように思います。何でも簡単にわかることをありがたがる風潮もあります。無用の用を忘れていくように感じます。君たちも社会に出れば、多くの人は何らかの企業、つまり利益を追求する組織に所属するのでしょうかから、損益の出ないように即効性のあるものを求めるのは理解できます。しかし、教育の現場にこれを当てはめてはいけないと、私はそう思っています。教育現場は無用の用に溢れています。効率だけを求める、つまり合理的精神だけが突出していくと、生徒の成長にはマイナスになる、これは私の直感です。合理的ということは、どういうことでしょうか。私はこれを、時間を短縮するという発想だと捉えています。近代になって、Time is money. という発想が蔓延している証左ではないでしょうか。若者の成長には時間がかかる、このことを忘れてはいけません。

また、松尾芭蕉の体得した概念と言われている「不易流行」という言葉を、私はいつも忘れないようにしています。不易(ふえき)というのは変わらないもの、あるいは変えてはいけないもの、つまり「不変の真理」です。流行(りゅうこう)は、変わるものですね。「時代による変化」と考えていいと思います。芭蕉は俳諧の世界において、変えてはならぬものと取り入れるべき新しいものを両立させたわけですから。不易と

流行は両立させなければならない。全く変わらない、これではいけない。新しいものに目をつぶってはいけない、同時に変えてはならないものは守らなくてはならない、芭蕉はそう考えたのですね。現代人は、科学技術の進歩とそれがもたらす便利さに圧倒されて、「流行」を追い求め、あるいは崇拜し、「不易」を顧みなくなっているように思えます。2045年には人工知能が人間を越えると言われていています。科学技術は日進月歩どころのスピードではなく、加速的に進歩していくようです。科学的なことを尊ぶ精神は、どんどん涵養されているように思います。つまり合理的なことは正しいのだと、私たちは疑っていませんね。しかし合理的な精神に「無用の用」という発想はありません。私たちが生きていくうえで「不易」なものは何なのか、このことを君たちにも考えてほしいと思います。

パスカルは合理的精神の塊だったデカルトを嫌いました。パスカルは「幾何学的精神」と「繊細な精神」の両方が大切だと考えましたからね。「幾何学的精神」というのは科学技術のことと考えていいでしょう。不易流行に照らし合わせれば、流行の部分が「幾何学的精神」で、不易の部分が「繊細な精神」のような気がします。具体的にパスカルが何を言っているのか。それは彼の『パンセ』を読んでみてください。

この夏に聴いた講演では、君たちの将来に次のような見通しが出ていました。

- ・子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く

キャシー・デビッドソン氏（ニューヨーク市立大学大学院センター教授）

- ・今後10～20年程度で、約47%の仕事が自動化される可能性が高い

マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）

- ・2030年までには、週15時間程度働けば済むようになる

ジョン・メイナード・ケインズ氏 1930年の発言（経済学者：いわゆるケインズ経済学の提唱者）

君たちはこういったことを、これから何度も耳にするでしょう。時代がどんどん変化する、もう今までの価値観は通用しない、そういった言葉もきつと溢れてくると思います。しかし若者は、もっと落ち着いて、むしろ最先端の科学技術に背を向けてはいけません。自分の立つ大地を確かなものにしてほしいと思います。

ちなみに、この夏に読んで面白かった本に、村上陽一郎『あらためて教養とは』（新潮文庫）があります。その巻末に、「教養のためのしてはならない百箇条」というのがあるんですね。ちょっとだけ紹介します。ぜひ、皆さんも読んでみてください。

- ・「美味しいもの」とそうでないものとははっきり区別はするが、食物についてとやかく言わない、書かない。
- ・「卑しいもの」とそうでないものとははっきり区別はするが、他人をそれで裁かない。
- ・「正しい」こととそうでないものとははっきり区別はするが、自分が正しいという主張を第一にはしない。
- ・社会の規範に従うことが、自分を失うことだと思込まない。
- ・自分の義務と権利を秤にかけて、権利に先に錘を載せない。
- ・流行語を使わない。
- ・外国語も略さない。ピアノフォルテをピアノと言うのはともかく、間違っても「ハリー・ポッター」を「ハリポタ」などとは言わない。
- ・頭に青筋が立つような話し方をしない。